

## 日本・尊円親王筆『長恨歌』の本文について

静永, 健  
九州大学准教授

<https://doi.org/10.15017/19667>

---

出版情報：中国文学論集. 39, pp.88-102, 2010-12-25. 九州大学中国文学会  
バージョン：  
権利関係：

# 日本・尊円親王筆『長恨歌』の本文について

静 永 健

## 一、日本伝存『白氏文集』諸本の価値

日本に伝わる白居易『白氏文集』のうち、文学研究の上で特に重要な書籍に次の三種がある。

第一は、十七世紀江戸初期の那波道円（一五九五—一六四八）刊本。該書は、当時朝鮮半島より日本にもたらされた版本をもとに刊行されたもので、全七十一巻各巻の配列が長慶末年（八二四）を以て画期とする「前集後集本」になっている。これは現在中国で一般に通行している「前詩後筆本」とは個々の卷子の順序が異なる（特に第二十一巻以降）。しかし、日本の多くの白居易研究者は、各作品の本文は通行諸本を参照するが、論文執筆の際に用いる『白氏文集』の巻数表示は、この那波本に従うことを基本としている。というのは、この那波本の順序こそが白氏自編の原型に近いためのだが、さらに白居易自身、特に晩年の作品は、なるべく自己の年齢と同数の巻に収めようとしていた形跡がある。例えば、以下に引用する『六十六』及び『感事』と題する詩は、那波本では正しく「第六十六巻」に収められているが、通行本（上海古籍出版社『白居易集箋校』および中華書局『白居易詩集校注』等）では「第三十三巻」に配列されるものである（花房氏作品番号三三〇四・三三二六）。

六十六

六十六

白居易

七十欠四歳 此生那足論

七十に四歳を欠く、此の生 那んぞ論ずるに足らん。

毎因悲物故 還且喜身存  
 安得頭長黑 爭教眼不昏  
 交游成拱木 婢僕見曾孫  
 瘦覺腰金重 衰憐鬢雪繁  
 將何理老病 應付與空門

還つて且らく身の存するを喜ぶのみ。  
 安んぞ頭の長く黒きを得ん、争でか眼をして昏からざらしめん。  
 交游は拱木と成り、婢僕には曾孫を見ゆ。  
 瘦せては覺ゆ 腰金の重きを、衰へては憐れむ 鬢雪の繁きを。  
 何を將てか老病を理めん、応に空門に付与すべし。

感事

服氣崔常侍 燒丹鄭舍人  
 常期生羽翼 那忽化灰塵  
 每遇淒涼事 還思潦倒身  
 唯知趁盃酒 不解鍊金銀  
 睡適三尸性 慵安五藏神  
 無憂亦無喜 六十六年春

事に感ず 白居易  
 氣を服す 崔常侍(崔玄亮)、丹を焼く 鄭舍人(鄭居中)。  
 常に羽翼の生えんことを期せしも、那んぞ忽ち灰塵に化したり。  
 淒涼たる事に遇ふ毎に、還つて思ふは わが潦倒の身。  
 唯だ知るは盃酒を趁ふのみにして、金銀を鍊るを解せず。  
 睡は適ふ 三尸の性、慵は安んず 五藏(臟)の神。  
 憂ひ無く亦た喜びも無し、六十六年の春。

この二首の作品が「第六十六卷」なのか、それとも「第三十三卷」でもよいのか。この違いを軽忽視することは白居易の文学生活の何か重要な点を見過ごしているような気がしてならない。那波本は、単に複数種ある『白氏文集』中の一本というだけでなく、研究上その最も基本となる版本なのである。ただし、この那波本所収の各作品の字句は、あまり良質なものではない。おそらく南宋時代後半期に出版されたものを底本としている所為であろう。一九五五年に北京の文学古籍刊行社から影印出版された南宋初期紹興年間の刻本(いわゆる紹興本)に比べると、大凡の傾向として、その本文は後者の紹興本が優れている。

日本の特筆すべき『白氏文集』の第二は「金沢文庫旧蔵本」である。現在は同文庫から流出し、巻3・巻4(この二巻は江戸時代の補写)・巻6・巻9・巻12・巻17・巻21・巻22・巻24・巻28・巻31・巻38・巻39・巻41・巻

47・卷52・卷54・卷62・卷63・卷65・卷68の二十一巻が東京の大東急記念文庫（五島美術館内、五島慶太が創設）に存し、巻8・巻14・巻35・巻49・巻59の五巻が千葉県の国立歴史民俗博物館に、更に巻33の一卷が奈良県の天理大学附属図書館に所蔵されている（巻の順序は全て前集後集本系統<sup>③</sup>）。これらは一括して今も「金沢文庫本白氏文集」と称され、鎌倉時代（一部平安後期の古写本も含む）に筆写されたものであるが、その巻末に記された「奥書」によつて、それらの原本が、平安時代に日本にもたらされた唐代の鈔本や、北宋時代の印刷本（これを当時の人々は摺本<sup>すりほん</sup>あるいは唐本<sup>とうほん</sup>と称した）に基づくものであることが判明する。

例として、ここでは現大東急記念文庫蔵「第十二巻」巻末の奥書部分を挙げよう（数字①～④は筆者）。

①會昌四年□□十四日（等鴈惠白）

②寛喜三年三月三日書寫了 寂有 唯寂房書寫之

同月中旬校合移點了 右金吾校尉豐奉重

③嘉禎二年三月十一日以唐本聊比較之了

④建長四年正月一日傳下貴所御本校合又畢

この卷子は、②日本の寛喜三年（二二三）僧寂有（唯寂房）や豊原奉重らによつて筆写校勘されたものだが、その原拠は①唐の會昌四年（八四四）すなわち白氏存命中に日本の留学僧慧萼が筆写したもの（あるいはその再転写本）を底本としている。そして、③日本の嘉禎二年（二三六）には「唐本」によつて第二次の校勘が施される。ちなみにここにいる「唐本」とは王朝名の唐ではなく、当時の日本人が中国を指している「雅稱」であつて、時代はすでに南宋である（ただしここに見える刊本は或いは北宋期の可能性がある）。そして更に貴重であるのは、④第三次の校勘である。日本の建長四年（二五三）の校合に用いられたのは「傳下貴所御本（伝え下されし貴所の御本）」であり、京都の天皇家あるいはそれに極めて近い筋の親王家に伝来していた古書（おそらく九〜一〇世紀の写本）である。「金沢文庫旧蔵本」は、紙墨の実質年代としては中国の南宋末年に相当するが、その本文の価値は唐代にまで遡

り得るのである。

さて第三の貴重な『白氏文集』は一般に神田本と通称される卷子本である。<sup>(4)</sup>これは『白氏文集』巻3・巻4の二巻、すなわち「新樂府五十首」のみを抄写したもので、その呼称は、この卷子の最終的な所蔵者である歴史学者神田喜一郎（一八九七～一九八四）の名前を冠したものである。現在は神田氏がかつて館長を務めていた京都国立博物館に收藏されている（京都国立博物館HPの收藏品データベースに「白氏文集」として公開）。

この本は平安時代後期、嘉承二年（一一〇七）に書き写されたもので、書写者は藤原知明（後に茂明と改名）である。平安の知識人たちが実際にどのように『白氏文集』を読んでいたかがわかる貴重な卷子である。これら日本の旧鈔本が間違いなく唐代の遺風を受け継ぐものであることは、すでに日本の太田次男博士らの詳細な研究によって明らかにされているが、今その一端を示すならば、新樂府其九『新豊折臂翁』の異同例が最もわかりやすい。すなわち『新豊折臂翁』第七句から第十句を神田本では以下のように作る（傍線は筆者、以下も同じ）。

翁云貫屬新豊縣、生逢聖代無征戰。唯聽驪宮歌吹聲、不識旗槍與弓箭。<sup>(5)</sup>

通行本では傍線部第九句を「慣聽梨園歌管聲（慣れ聴く梨園の歌管の声）」に作る。「歌管」と「歌吹」とはほぼ同じ意と見ても、「梨園」と「驪宮（驪山宮）」とはかなり異なる文字である。しかしこの「唯聽驪宮歌吹聲」の本文は日本の神田本のみが唯一なのではなく、北宋初期の『文苑英華』（卷三三）所収の本文、台湾に伝わる北宋刊『白氏諷諫』本<sup>(6)</sup>、そして敦煌から出土した『白氏詩集殘卷』に一致し、この本文が五代から北宋にかけての時期、日本のみならず中国本土でも広く読まれていた系統であったことが判明する。「梨園」がよいか、それとも「驪宮」がよいか。その最終判断は後世の研究を俟つべきだが、筆者は『長恨歌』の「驪宮高き処 青雲に入り、仙樂 風に飄へりて処処に聞こゆ」の場面を踏まえ、「驪宮」に作るこの神田本の本文に左袒したい。

なお『新豊折臂翁』詩には他にも興味深い異同がある。神田本と敦煌本の第二十七句から第三十句に、

張弓簸旗俱不堪、從茲始免征雲南。且圖揀退歸鄉土、骨碎筋傷非不苦。<sup>⑨</sup>

とある。これを通行本は傍線部第二十九・第三十句を乙し、

張弓簸旗俱不堪、從茲始免征雲南。骨碎筋傷非不苦、且圖揀退歸鄉土。

に作る（ただしここでは文苑英華本も通行本と同じ）。この乙倒する本文は清代の盧文昭『群書拾補』が引く明代正徳年間の海寧衛指揮嚴震克承本にも見えるとあり、やはり一定の価値を認めるべきであろう。このように日本に伝存する旧鈔本『白氏文集』（金沢文庫本、神田本等）は、通行本とは異なる系統に属する貴重な文献資料なのである。この他にも「管見抄」（国立公文書館内閣文庫所蔵）など特記すべき『白氏文集』の旧鈔本が幾つか存するが、次章において個別の具体例とともに紹介することとしたい。

## 二、尊円親王筆「長恨歌」の発見

さて、日本の旧鈔本を用いて白居易の作品を読むと、その本文は実際にどのように変化するのか。以下本稿は『長恨歌』を例として挙げる。『長恨歌』の場合、日本には単行の筆写本を含めると極めて多くのテキストが残されているが、特にここでは上述の「金沢文庫本」（二三年抄写。以下、金沢本と略称）と、同じく日本鎌倉時代に筆写された国立公文書館内閣文庫蔵「管見抄」（二五九年原抄、一三五年重抄）、そして昨二〇〇九年東京の古書店より発見された室町初期の尊円親王（二九八―一三五六）の書写した法帖（以下、尊円本と称す）を中心に筆者の考察を展開したい。なお主な字句異同の箇所を以下（A）から（H）の八場面に分けて論述する。

（A）「楊家有女初長成、養在深窓人未識。<sup>⑩</sup>」

通行本長恨歌では「養在深閨人未識」に作る部分である。しかし日本旧鈔本である上述の三本は全て「深窓」に作る。実は現在の日本語の慣用句の中に高貴な家庭に育った美少女を指して「深窓の令嬢」という言葉があるが、同様の語彙として「深閨の令嬢」という表現は馴染みが薄い<sup>(12)</sup>。この旧鈔本系統の文本が日本で如何に人口に膾炙していたかを示す例である。なお金沢本では「窓」字の右脇に「閨摺本」という書き入れが見える。一二三六年の校勘に使用された宋刊本では既に「深閨」になっていたことがわかる。中国から新たに伝来した「刊本」を手にしながら、即座にそれに従わないのがこの当時の日本の校勘例である。ここには刊本系統の本文を中心とする中国（朝鮮半島も同様）と、なおも旧鈔本文を墨守しようとする日本との本文校勘上の顕著な分岐点がある<sup>(13)</sup>。

(B) 「夕殿螢飛思悄然、秋燈挑盡未能眠。遲々鐘漏初長夜、耿耿星河欲曙天。」

通行本長恨歌は「秋灯」を「孤灯」に、「未能眠」を「未成眠」に、そして「鐘漏」を「鐘鼓」に作る箇所である。しかし中国の諸本の中でも文苑英華本（卷三四六所収）が日本旧鈔本の本文を支持する。すなわち第二句を「秋（二作孤）灯挑尽未成眠」とし、第三句はまさしく「遲々鐘漏初長夜」に作るのである（鐘は鐘字に同じ）。筆者は何の根拠も無く日本旧鈔本を是認しようとしているのではない。伝来の系統を異にする他の地域の諸本に少しでも一致する本文が見つかった場合、その異文の可能性を考えるべきだと主張するものである。なお後半二句は藤原公任（九六六—一〇四一）撰『和漢朗詠集』（秋夜）にも採録されており、これも「鐘漏」に作っている。

(C) 「鴛鴦瓦冷霜花重、舊枕故衾誰與共。」

ここは通行本は「鴛鴦瓦冷霜華重、翡翠衾寒誰與共」であり、大きく字句が異なる部分である。しかしここでも文苑英華本が日本旧鈔本に一致している。また面白いのは日本十一世紀の長編小説『源氏物語』（葵巻）にこの一句が引用され、まさしく「旧き枕 故き衾 誰とともにか」と見える。日本においては、和語で書かれた文学作品も、時には古いテキストを保存することに大きな機能を果たしているのである。なお「旧枕故衾……」という表現は、往時の楊貴妃の「体温」を感じさせるような些か官能的な表現でもある。文学作品の異同とは、概して筆写や印刷の

過程で起る偶発的な錯誤によつて生じるものであるが、ただこの異同に関しては、後世の中国、特に宋代の知識人士たちによる意図的（教育的）な忌避、改竄の可能性も考えられよう。

(D) 「行宮見月傷心色、夜雨聞猿斷腸聲。」<sup>18)</sup>

この部分は通行本および中国の全ての刊本が「夜雨聞鈴腸斷声」に作るため、あるいは旧鈔本系統の本文を認めぬとする意見があるかもしれない。しかも、中国には有名な詞牌「雨霖鈴」もあり、明らかに長恨歌のこの詩句に基づくものである<sup>19)</sup>。しかし現在アイルランドに所蔵されている日本・狩野山雪（二五八九—一六五二）<sup>20)</sup>が描いた『長恨歌画卷』には、玄宗が蜀にあつて行宮の一室より崖上の「猿」を眺めやる姿が描かれている。約一二〇〇年の流伝の結果として、幾つかの本文異同にも、すでに容易には拭い去ることの出来ぬそれぞれの歴史が刻まれているのである。

例えば陶淵明の飲酒（其五）詩の「悠然見南山（悠然として南山を見る）」句は、一説には蘇東坡以降の伝承であつて、古くは「忽然望南山」であつた可能性がある<sup>21)</sup>。しかし、たとえ最終的にその説が立証されたとしても、私たちは、今となつては両者を併記してこの詩句を読み続けるほかは無い。我々は陶淵明の後輩であるとともに、蘇東坡の後輩でもあるからである。従つて筆者は、この「聞猿」「聞鈴」の異同については、性急にいずれかを是とし、いずれかを廃する考え方を取らず、中国刊本系統の本文（聞鈴）と、日本中世の旧鈔本系統の本文（聞猿）として、双方の本文を併記する方式を採りたい。読者が「中国文学」としてこの作品を読む場合は「聞鈴」が宜しいが、もし『源氏物語』など日本古典との関係を重視して読む場合、その本文は「聞猿」を採るべきであるためだ。このことは、さきに提示した(A)と(C)の本文異同についても同様である。

### 三、第三の本文、尊円本「長恨歌」

前章では都合四つの異同の例から、中国における刊本系の本文と、日本中世に残された旧鈔本系の本文とが、す



で十分な歴史を有し、それぞれの文学史に重要な影響を残しつつ伝承されていることを見てきた。しかし以下(E)～(H)の例では、この尊円本『長恨歌』の本文が、他の日本国内の旧鈔本の本文(ここでは金沢本を中心とする)とも大きな差異を有していることを論じたい。話柄が多少煩瑣になることを、あらかじめ諒恕されたい。

(E)「芙蓉如面柳如眉、對此如何不淚垂(金沢本原抄作對此如何…、芙蓉如面…)<sup>22)</sup>」

この二句の場合、金沢本原抄および管見抄の本文が「對此…、芙蓉…」の順にするのに対し、通行本各本そして金沢本の「摺本」校語が「芙蓉…、對此…」の順に作っている。詩句の順序が逆になるのである。従来の説では、金沢本原抄を貴重とする観点から「對此…、芙蓉…」句を是とする研究者が少なくなかったが、昨年発見された尊円本では、それとは異なる結果が得られた。すなわち尊円本の文字は他の日本旧鈔本とは異なり、却って中国の一般的な通行本に一致するのである。

実はこの尊円本とは、十四世紀の写本ではあるが、そのテキストの来歴は古く、あるいは金沢本よりも古い可能性がある(後述)。そこで筆者はこの尊円本文に依拠し、従来の校勘研究(「對比…、芙蓉…」)を改め、再び中国の通行本(「芙蓉…、對此…」)を支持する。長恨歌の本文は、尊円本を得たことにより、ここに金沢本を中心とする第一の系統(旧鈔本金沢本系統)と中国南宋刊本に始まる第二の系統(刊本系統)とに伍して、新たな第三の系統<sup>23)</sup>が存在することを認めたいのである(本稿では仮に尊円本系統とする)。本文異同を考えるに当たって最も重要なことは、諸本のデータをただ漫然と羅列するだけでなく、様々な角度からその異同を幾つかの系統に分類してゆくことにある。以下(F)～(H)の三例も、この三分類に従って考えたいと思う。

(F)「春風桃李花開日、秋露梧桐葉落時。<sup>23)</sup>」

通行本では「花開夜」そして「秋雨梧桐…」となる部分である、まず上句は金沢本、管見抄そして尊円本ともに「花開日」に作る。また文苑英華本も「花開日」に作り、これまでの方式に則って「日」字を旧鈔本系統と考えることができる。

難題は下句の「秋露」である。金沢本、管見抄そして文苑英華本ともに「秋雨」であり、これまでの校勘研究で「秋露」を支持する意見は無かった。しかし、日本には他に「秋露」に作る本文が残っている。藤原公任『和漢朗詠集』である。朗詠集では宮内庁所蔵の粘葉本を筆頭に諸本みな「秋露」に作るが、これは公任の誤認ではなく、正しく当時（十一世紀の日本）「秋露」に作るテキストが存在したことに拠るものであろう。

もちろん、元の白樸（二三六〇？）『梧桐雨（唐明皇秋夜梧桐雨雜劇）』を知る私たちにとって、「秋雨」の文字の印象は強い。しかし「秋露」も、夜の雨滴を表現することでは同断であり、情景としてそれほど懸け離れた文字ではない。現に『文選』卷十六所収、江淹「別賦」の、佳人との離別を悲しむ章段に「秋露如珠（秋露は珠の如し）」とある。長恨歌においても当初「秋露」に作られていた可能性はあるのではなからうか。

(G) 「天旋地轉迴龍馭、到此躊躇不能去。」

通行本をはじめ一般に「天旋日転」とする部分である。しかも「日転」に作るのは南宋紹興刊本のほか、日本的那波本、そして金沢本、管見抄も「日転」である。しかし、ここには大変面白い現象が見られる。実は、それらよりも遥かに後出のテキストの笈の明代「馬元調刊本」や明刊『文苑英華』本（ただし明鈔本は「日転」、そして同じく明の胡震亨『唐音統籤』の本文が「地転」に作るのである。一方、日本旧鈔本の中では唯一尊円本が「地転」に作っている。

時代の順序から考えても、十四世紀の尊円本が馬元調本や胡震亨の基づいた刊本に従って文字を改めることは無く、また地理的条件からも日本の旧鈔本が明刊本に影響を与えることは有り得ない。おそらく金沢本や紹興本とは系統の異なるテキストが尊円本の原本であり、またそれが明代の中国にも僅かに伝わっていて、偶然にもこの明代の諸刊本に掬せられて残ったと見ることはできないだろうか。尊円本の発見は、長恨歌本文の伝承に関しても、これまでとは異なる新しい見方を我々に提供しているように思われるのである。

(H) 「金屋粧成嬌待夜、玉樓宴罷醉和春。」

この異同では、いよいよ尊円本の基づいた本文がいつた何時頃まで遡源できるのかを考えたい。

当該句は周知の通り通行本では「：嬌侍夜」に作る部分である。この異同は刊本系統には存在しない。そして管見抄が「待」に作るが、金沢本では原抄の本文を「侍」に作り、その左脇前に「待イ(異本のイ)」と注記する。金沢本の校記の場合、先に(A)「深閨」の項で述べたように、その異本の出典は「摺本」であり、しかも右脇に付されていた。これが「③嘉禎二年(二三六)」時の校合だろことは既に述べたところである。するとこの場合の左傍注「待イ」は、(A)の校勘時とは別のものとなる。思うにこの異本は、金沢本卷十二奥書にいう「④建長四年(二五二)傳下貴所御本」の校合結果ではあるまいか。すなわち、十三世紀に漸く公開された天皇家秘蔵の稀観本だと考えられるのである。

一方、「尊円本」の筆写者尊円親王(二九八〜三五〇)は、日本第九十二代の伏見天皇(二六五〜三三七)の第六皇子、幼くして出家し「法親王(天台座主)」として日本の宗教界を領導した人物である。また彼は仏教界のみならず、書道にも卓越した才能を發揮し、その墨跡は「尊円流(御家流)」と称されて江戸時代まで「書聖」として尊崇されてきたのである。今回発見の「尊円本長恨歌」は、おそらく天皇家秘蔵の『白氏文集』を底本として書写されたものであり、その年代は一挙に平安時代(十〜十一世紀)に遡る可能性がある。まさに第一級の古本長恨歌である。この「嬌侍夜」という文字異同は、従来殆ど顧みられることが無かったが、この尊円本の出現によって、一躍その信憑性が高まったと言える。

ちなみに筆者は「待」こそが正しい本文だと考える。長恨歌にはその少し前段に「侍兒扶起嬌無力」や「承歡侍宴(旧鈔本系統作侍寢)無間暇」など、「侍」字が頻出する。またこの「金屋…玉楼…」の一聯は上句を「待夜(夜を待つ)」とすることで宴席に出る直前の楊貴妃を指し、下句に描かれているところの宴が果てて「和春」する酔妃の姿と正しく一对の屏風絵のように呼応するのである。

このように尊円本長恨歌は、従来の解釈にも幾つかの訂正を求めることができる極めて重要なテキストなのである。ことほど左様に、日本にはその存在が十分確認されていない貴重な漢籍がまだまだ数多く眠っているのである。

#### 四、『白氏文集』と日本の伝統文化

尊円親王は何故このような皇室秘蔵の『白氏文集』を抄録したのだろうか（彼には他にも『琵琶引』など多くの墨跡が残っている）。それは、『白氏文集』の旧鈔本を所持し、それを書き写して公開することが、自らの天皇家としての王統の正しさを「文化的」に立証することに繋がるからである。

十四世紀中葉、日本の政治主権が「鎌倉幕府」（北条氏）から「室町幕府」（足利氏）に変革した頃、天皇家の内部も、二つの血統に分裂して対立していた。いわゆる日本の南北朝時代である。その一方の京都朝廷側（北朝・持明院統）に連なる尊円親王は、この皇室の秘籍『白氏文集』を書き写すことによつて、その王統の正統性を主張していたと考えられる。

ところで、日本の中国文学研究において、中国には見られない大変不思議な現象が「白居易研究」である。その専門学術誌『白居易研究年報』も既に第十号が刊行された。編集委員の一人である筆者は中国の研究者から「杜甫研究年報」や「李白研究年報」ではなく、何故「白居易」なのか？というをよく質問される。

しかし、その答えは明白である。

日本の伝統文化、特にその文化の基礎的な部分は、京都に都を置いた平安時代に形成された。そして、その最も頂点となる時期が、紫式部『源氏物語』（二〇〇八年以前成立）の頃である。以後、日本の文化は、もちろん様々な方面に展開してゆくものの、しかし、常にその回帰する源点は、この十一世紀初頭にあると言える。この時、中国および朝鮮半島をも含む東アジア一帯で最もスタンダードな文学こそが白居易であった。その証拠に北宋の一大勅撰詞華集『文苑英華』一千卷（編纂九八二―九八六）に他を圧する数で作品が収録されているのが『白氏文集』である（七〇〇余首）。日本の伝統文化を考えるにおいて、最もその淵源となったものの一つが、李白でも、杜甫でもなく、白居易だというのは、既にこの頃に定着していた考え方なのである。従つて旧鈔本『白氏文集』は、日本人、さらにはその皇室にとつて、とりわけ大切に保存しなければならない重要な古典籍だったのである。一方、中国にはそのような緊張感は全く存在しない。故に、以後中国で出版される『白氏文集』と日本に伝えられた『白氏文集』と

は、その伝承される本文にもおのづから差異が生じてゆくのである。

最後に日本旧鈔本を用いての白詩本文の校勘例をもう一つ挙げたい。通行本『白居易集』では巻24、前集後集本『白氏文集』では巻54所収の次の詩である（花房氏作品番号二四六九）。

城上夜宴

城上の夜宴

白居易

留春不住登城望

春を留めて住まらず 城（城楼）に登りて望む、

惜夜相将秉燭遊

夜を惜しみ 相将に 燭を秉りて遊ばん。

風月萬家河兩岸

風月 万家 河の兩岸、

笙歌一曲郡西樓

笙歌 一曲 郡の西楼。

詩聽越客吟何苦

詩に越客を聴けば 吟ずるこそ何ぞ苦ろなり

酒被吳娃勸不休

酒は吳娃（のお酌）に被りて 勸めて休まず。

従道人生都是夢

従道ひ 人生都て是れ夢なるも、

夢中歡笑亦勝愁\*

夢中の歡笑 亦た愁ふるに勝へたり。

詩歌本文に特に著しい異同は無い。しかし日本旧鈔本のうち金沢本、管見抄、また奈良東大寺に所蔵される鎌倉時代の抄本「要文抄」には、この詩の末尾（\*部分）に「歡者所云（歡者の云ふ所なり）」との四文字の自注が残されている。『人生はみな夢、しかし夢の中の歡笑もまた愁し』とは、ときに蘇州刺史であった白楽天自身の感想ではなく、宴席に侍る一人の妓女（歡者・吳娃）がふと彼に漏らした言葉であったことが、この自注の存在によって判明する。日本の旧鈔本を参照することによって「老嫗解詩」の詩人白楽天の真面目がここにも窺われるのである。

【附記】本稿は二〇一〇年三月、復旦大学での講演原稿「日本旧鈔本『白氏文集』校勘方法」に基づくものである。招聘い

ただいた復旦大学中文系の祝克懿教授、陳引馳教授、また同古籍研究所の陳正宏教授に改めてここに鳴謝したい。ま

日本・尊円親王筆『長恨歌』の本文について

た、架蔵の尊円本長恨歌は、全文の写真を影印出版する予定だが、今は九州大学中国文学研究室のホームページに暫時掲載中である。

注

- (1) 四部叢刊初編所収。また平岡武夫・今井清編『白氏文集歌詩索引』（全三冊、一九八九年、同朋舎出版）下巻にも詩集部分のみの影印が掲載されている。
- (2) 顧学頤『白居易集』（全四冊、一九七九年、中華書局）、朱金城『白居易集箋校』（全六冊、一九八八年、上海古籍出版社）、謝思焯『白居易詩集校注』（全六冊、二〇〇六年、中華書局）の三種のほか、これら三本が依拠した南宋紹興年間の無名氏刊本、明の馬元調刊本等の本文を一括して、本稿では「通行本」の呼称を用いる。
- (3) 市販されている写真版は以下の通り。天理図書館善本叢書漢籍之部『文選・趙志集・白氏文集』（一九八〇年、八木書店）、川瀬一馬監修『金沢文庫本白氏文集』（全四冊、一九八三〜八四年、勉誠社）、国立歴史民俗博物館蔵貴重典籍叢書文学篇第二十一巻『漢詩文』（二〇〇二年、臨川書店）。
- (4) 太田次男・小林芳規『神田本白氏文集の研究』（一九八二年、勉誠社）参照。
- (5) 静永『漢籍伝来——白楽天の詩歌と日本』（二〇一〇年、勉誠出版）所収「平安文人たちと『白氏文集』」参照。
- (6) 「翁は云ふ、貫は新豊県に属し、生まれて聖代に逢ひ征戦無し。唯だ驪宮の歌吹の声を聴き、旗槍と弓箭とを識らず。」
- (7) 中華書局上海編輯所編輯『白氏諷諫』（一九五八年、中華書局）の影印を参照。
- (8) 太田次男『旧鈔本を中心とする白氏文集本文の研究』（全三冊、一九七七年、勉誠社）中巻「敦煌本に関する研究」を参照。
- (9) 「弓を張り、旗を簸ぐこと俱に堪へず、茲より始めて雲南に征くを免かる。且く揀び退けられて郷土に帰るを図るも、骨砕け筋傷るること苦しまざるに非ず。」
- (10) 『長恨歌』の校勘作業の先例として、平岡武夫・今井清『白氏文集卷三』卷十七（一九七二年、京都大学人文科学研究所）、近藤春雄『長恨歌・琵琶行の研究』（一九八二年、明治書院）、そして太田次男『旧鈔本を中心とする白氏文集本文の研究』

究」(注8既出) 中巻「長恨歌」「長恨歌伝」の本文」を参照。

(11) 「楊家に女有り初めて長成す、養はれて深窓に在り人未だ識らず。」

(12) 小学館『日本国語大辞典』(第二版、二〇〇二年)には「深閨」「深窓」ともに用例が見えるが、「深閨」は十七世紀初頭の『日葡辞書』と十七世紀後半の『評判記・色道大鏡』のほかは明治以降の用例、一方「深窓」は九世紀『経国集』の小野年永の漢詩の用例を筆頭に、十四世紀後半『太平記』「養はれて深窓に在りし時より……」(巻十五・賀茂神主改補事)、十九世紀初頭『読本・椿説弓張月』「深窓に養はれて、いまだ君が武勇をしらず」(前篇第五回)の用例が抽出されている。『太平記』および馬琴『弓張月』の用例はまさしく当時、旧鈔本系統の長恨歌本文が一般に滲透していたことを示している。

(13) 静永『漢籍伝来』(注5既出) 所収「十三世紀の『白氏文集』」参照。

(14) 「夕殿に蛩飛んで思ひ悄然、秋灯挑げ尽くして未だ眠る能はず。遅々たる鐘漏初めて長き夜、耿耿たる星河曙けんと欲する天。」

(15) 宮内庁書陵部所蔵、伝藤原行成(九七二〜一〇二八)筆『粘葉本和漢朗詠集』を参照。

(16) 「鴛鴦の瓦冷やかに霜花重し、旧き枕 故き衾誰と与共にか。」

(17) 更に明末に編纂された唐詩選集の一本唐汝詢撰『唐詩解』も「旧枕故衾」に作る。神鷹徳治『源氏物語』と『唐詩解』(『アジア遊学』第一一六号〈漢籍と日本人Ⅱ〉、二〇〇八年十一月、勉誠出版)を参照。

(18) 「行宮に月を見れば心傷ましむる色あり、夜雨に猿を聞けば腸断つるの声あり。」

(19) 南宋の王灼『碧雞漫志』巻五に詞牌「雨淋(霖)鈴」の原拠として「明皇雜録」および「楊妃外伝」からの一文が引用されている。曰く「帝蜀に幸し、初めて斜谷に入る。霖雨弥旬、棧道中に鈴虫を聞く。帝方に貴妃を悼念し、其の声を採りて雨淋鈴曲を為りて以て恨みを寄す……」と。

(20) 神鷹徳治解説『狩野山雪画 長恨歌画卷 The Chester Beauty Library』(二〇〇六年、勉誠出版)を参照。

(21) 石川忠久『陶淵明とその時代』(一九九四年、研文出版) 所収「見南山」と「望南山」を参照。

(22) 「芙蓉は面の如く柳は眉の如し、此れに対して如何ぞ涙垂れざらん。」

日本・尊円親王筆『長恨歌』の本文について



- (23) 「春風 桃李 花開く日、秋露 梧桐 葉落つる時。」
- (24) 堀部正二・片桐洋一『校異和漢朗詠集』（一九八一年、大学堂書店）を参照。
- (25) 「秋露」に作るテキストは尊円本と『和漢朗詠集』のほか、太田次男氏の校勘（注10既出）に拠れば、「長恨歌」単篇の旧鈔本である正安本・神田氏正安本・文和本・斯道文庫本・陽明墨跡本の五本が存在する。
- (26) 「天旋<sup>めく</sup>り地転<sup>ま</sup>じて龍馭<sup>り</sup>を迴<sup>かへ</sup>し、此に到<sup>こ</sup>りて躊躇<sup>ちゆうじゆ</sup>して去<sup>あ</sup>る能<sup>あた</sup>はず。」
- (27) 「金屋に粧<sup>よそ</sup>ひ成りて嬌<sup>こ</sup>として夜を待ち、玉楼に宴罷<sup>やんぱ</sup>みて酔<sup>よ</sup>ひて春に和す。」
- (28) 尊円親王については、伊藤緑苔『入木抄の研究』（一九六五年、中部日本新聞社）、安藤隆弘『入木抄』（一九八一年、日本習字普及協会）、日本名跡叢刊『南北朝——尊円親王 三体要略字類抄』（神崎充晴解説、一九八四年、二玄社）、神崎充晴『尊円親王筆「琵琶引」』（『水荃』第九号、一九九〇年、古筆学研究所）、神鷹徳治・山口謡司「資料紹介…法帖尊円親王「長恨歌」（旧鈔本系本文）影印・翻字」（『白居易研究年報』第三号、二〇〇三年、勉誠出版）を参照。
- (29) 本稿が考察する尊円本が正しく尊円親王の真跡であるかどうかについては、なお議論の餘地があるかもしれない。この尊円本は、もとは一幅の卷子本であったと考えられるが、今はおよそ每幅一〇cm間隔で切断して二十一枚の短冊とし、折本に貼り付けたものとなっている。そして表紙中央に「尊圓親王御真跡」との紙題簽が貼られ、更に外函を作つて、蓋に直接「青蓮院宮／尊圓法親王 御真蹟」との墨書がある。筆者は本稿において考察した通り、本文の字句異同の系統が正しく金沢本等とは別系統に属することを根拠として、本墨跡を尊円親王の真跡であると判断するものである。
- (30) 宋・釈惠洪『冷齋夜話』卷一に見える故事。曰く「白樂天 詩を作る毎に一老嫗に之れを解せしむ。問ひて曰く『解するや否や』と。嫗『解す』と曰はば則ち之れを録し、解せざれば則ち之れを易ふ……』と。